

研修報告書 No.17

所 属： 昭和大学藤が丘病院

研修先： 渭南病院、大井田病院、大正診療所

2019年2月4日から2月24日まで高知県幡多グループで地域研修をさせていただきました。四国という土地は初めてであり、最初は不安も多かったのですが、研修が始まると毎日が充実しており、あっという間の1ヶ月間でした。

最初の2週間は、高知県最南端の土佐清水市にある渭南病院での研修でした。救急車も受け入れており、急性期から慢性期まで幅広い疾患の患者さんが来院されていました。外来業務が主な研修でしたが、ヘルニア手術、ERCPも経験し、週2回の特別養護老人ホームへの往診等も行いました。また、自宅に帰るために必要不可欠である在宅評価にも同行することができました。リハビリの進行具合を把握している作業療法士も一緒に自宅へ向かうことで、自宅での動線の確保や生活する上で必要なものの整備の調整が工夫できると感じました。レクチャーやムカデ咬傷の対処法、釣り針が刺さった症例、マダニによる重症熱性血小板減少症候群(SFTS)などの症例の講義もしていただき、地域に、特性のある疾患について学ぶことができました。

また、四万十町にある大正診療所でも2日間だけでしたが、研修をしました。一番印象に残っていることは在宅の看取りでした。私は普段は大学病院で研修をしており、病院での看取りしか経験したことがなかったからです。診療所の先生からもこの診療所で在宅の看取りは年に3~4人しかいないと聞き、とても貴重な経験ができました。施設や病院で生活している人でも、自宅で最後を迎えたいという希望がある方は多くいると思います。しかし、家族の支援、在宅での介護等を考えると、現実的には困難な例が多いかもしれません。制度やサービスを利用して、できる限り患者さんの意志に沿ってあげることが必要だと考えました。そのためには利用できるものはどのようなものがあるのかを多職種で話し合うことも重要だと感じました。老衰を含め、どういう最期を迎えるかについて再考する良い機会となりました。

残りの期間を高知県西南端の宿毛市にある大井田病院で研修をしました。学生の頃も訪問診療に同行したことはありましたが、今回初めて訪問看護に同行することができました。訪問時間は限られているため、その中で必要なものを患者さんに合わせて提供しているのが印象的でした。また、この病院で驚いたことは、他院や救急と情報共有できる基盤が整っている点です。電子カルテ上で複数の医療機関にわたる患者さんの情報を確認でき、どのような治療や看護・介護を受けているかが一目で分かり、重複治療の防止や今後の治療方針決定において、便利なシステムだと思いました。同じ幡多グループの病院でもそれぞれで担う役割が異なることを実感しました。

今回の研修を通して、一人の患者さんの急性期から在宅までをどのように診ていくかを学びました。また、患者さんに合わせた医療・看護・介護を提供するためには、多職種や地域全体で協力していく必要があると感じました。そのために、私はこれから専門分野へ進みますが、自分の分野以外も知識を深めていかなくてはと痛感しました。

最後に、今回の研修で海の幸をはじめ美味しいものを堪能し、休日は観光も満喫することができました。研修期間中にお世話になりました先生方、病棟スタッフ、事務の方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。